

CROSS

NBU 総合インフォマーション

N-SPO

いざ、夢の舞台へ

N-CUL

かるたで学ぶSDGs

Professor's ROOM

英語教育のありかた

おおいた、つくりびと

廃材アートでつくる笑顔

NBU COLORS

26

2022
MARCH

特集

2021年度
卒業研究
論文合同発表会



2021年度 卒業研究・論文合同発表会 最優秀賞 「情報メディア学科 小島研究室」

2021年度の卒業研究・論文発表会で最優秀賞に輝いたのは、
工学部情報メディア学科小島研究室の森本吾子美さん、木下広天さん。
映像制作の第一線で活躍した小島教授のもと、
学生ならではの視点でドキュメンタリー映像作品の制作に取り組んだ。



取材対象者の 本音を届けるために 大切なことは

小島 まずは、最優秀賞おめでとう！今回制作した作品は「おたく風邪の合併症から脳死状態になった娘と在宅看護する母親」のドキュメンタリー。とても難しいテーマなので心配していたよ。「本人を取り巻く方々の心情を届けることを忘れずに」とアドバイスしたのを覚えている。大変なことが多かったと思うけれど、振り返ってみて感じることは？

森本 撮影を進めていく内に、企画立案時の自分の未熟さを痛感しました。主治医にインタビューをしたのですが、制作側の私たちが事前の勉強が足りていなかったこともあり、病気の詳しい症状を理解することができませんでした。改めて、事前リサーチの重要性を実感しました。

木下 合計3回の撮影を行いました。今、振り返ると、初めのうちには自分本位で接していたこ

ともあり、「取材者に受け入れられていないなあ」と感じることも多かったです。しかし、それが自分たちの姿勢を見つめ直すきっかけになりました。取材対象者が参加する医療的ケア児サークルでボランティアをしたり、一緒に食事をしたり、撮影とは別の部分でも交流を深めるように意識しました。次第に信頼していただけるようになり、胸の内や本音を少しずつ話してくれるようになりました。

小島 ドキュメンタリー作品の取材で大切なのは、取材対象者の心の奥深くの気持ちや「この人たちに何言ってもいい」と思ってもらえる存在になることです。その域までたどり着いたことが素晴らしいと思うよ。

森本 初めは自分の思いばかりが先行して、相手の気持ちを理解していない失礼な質問をしたことも多かったかもしれません。相手の状況や気持ちをしっかりと考えた上で、取材対象者に寄り添った取材心がけました。

小島 当初は、お母さまから

ないと気づき、撮影アシスタントや編集作業を率先して行うようになりました。

小島 研究室に入ったばかりの頃は、2人とも自分のことで一杯だったと思うよ。映像制作について理解していくと同時に、自分の意見を言えるようになり、今では後輩の指導もできるようなった。後輩にアドバイスしたり、自分なりの意見を伝えたりできるようなるにつれて、作品の出来も良くなっていくと思う。すでに映像制作の下地や基本はできています。社会人になってもこの調子で先輩たちから吸収して、後輩を可愛がっていったね。楽しみにしているよ。

森本 映像を制作する楽しさや作品が完成したときの達成感、視聴者から評価をもらったときの高揚感はずいぶんあります。卒業後も小島研究室で学んだことを活かしながら頑張ります。

木下 私もただ映像を編集するだけではなく、構成や演出のことも考え、小さな気遣いができる編集マンを目指します。

「介護の大変さを見せたくない、不幸だと思われたくない」と言われていたようですが、介護のことやその大変さ、心情を発信することで、多くの人のサポートが受けられるようにしたいという君たちの気持ちが届いたのではないかな。お互いの気持ちが少しずつ変化して素晴らしい化学反応が起きたんだね。

森本 映像を先生に見てもらった際には、作り手側の気持ちを押しつけている部分がないかなど、私たちが気づかなかったプロ目線のアドバイスをもらいました。何度も修正を重ねることで、自分たちが心から納得できる良い作品を完成させることができました。

木下 私も、視聴者のことを置き去りにして、自分たちが伝えたいことばかりを考えていましたが、先生のおかげで「視聴者が見たいものや知りたいことを重視する」という映像作品を制作する上で大切なことに気づくことができました。

小島 小さな気づきや学びを

工学部 情報メディア学科4年
木下 広天
Hiroataka Kinoshita
(熊本県/県立熊本北高校出身)



小島研究室で映像編集の面白さや奥深さを体感し、映像編集会社を目指すようになった。映像やゲーム、Web、広告など幅広く手がける東京の「クリーク・アンド・リバー社」に就職予定。

工学部 情報メディア学科4年
森本 吾子美
Anemi Morimoto
(大分県/県立杵築高校出身)



中学の頃から映像制作に興味を持ち、小島研究室へ。自身の出身地である杵築の文化についての映像などを制作。卒業後は、東京の映像制作会社「KEEL staffing」に就職し、ディレクターを目指す。

工学部
情報メディア学科教授
小島 康史
Yasufumi Kojima



長年、多くの映像作品制作に携わり、数々の受賞経験を持つ。人の心を動かす動画コンテンツについて研究し、制作者も視聴者も感動できる映像作りに取り組んでいる。

作品に反映させたからこそ、良い作品が完成したんだよ。その後の上映会で映像を見てもらったなら、たくさんの感想がもらえたね。

森本 はい、たくさんの方に心を持っていただけだよ。嬉しかったです。それと同時に、まだまだ見落とししていた点や、まだまだ伝えなければいけないこともあったことに気づくことができました。

木下 出演者や医療的ケア児

大学での学びを糧に 映像制作会社で 夢の実現を目指す

の保護者からも多くの感想をいただきました。達成感を味わいましたし、今後の映像制作へのモチベーションにつながりました。

森本 研究室に入ったばかりの頃は、自分の意見を伝えることが苦手でした。3年生にな

テーマ——ドキュメンタリー映像作品の研究及び映像制作



ドキュメンタリー映像の具体的な演出手法や編集技法について研究・考察し、実際に映像作品の制作を行った。おたく風邪の合併症によって脳死状態となった娘と在宅看護を行う母親にフォーカスし、約1年半の取材を実施し、制作した「眠り姫〜母と共に生きる」。臨場感を伝える、心象風景を組み込む演出手法を取り、視点の異なる複数カットを組み

合わせて表現する「モンタージュ」や、2つの場所での出来事を交互に映し出す「クロスカットテイング」といった編集技法を用いて制作した。完成後はZoomを使って上映会を行い、「医療的ケア児のことを周知することができて良かった」「知りたいこと、見たいことが映し出されていてわかりやすい映像だった」など、多くの意見が寄せられた。

2021年度 卒業研究・論文合同発表会 優秀賞

航空宇宙工学科 原田研究室

昆虫の持つ特性を模倣し、開発や技術に生かす「バイオメテックス」が進む昨今、トンボの翅の構造からヒントを得て「コルゲート翼」の研究を行っている原田研究室。下東史弥さんは、このコルゲート翼とキャンパ翼、平板翼の翼周りの空気の流れを回流水槽を用いて計測。地道な実験・解析を繰り返し、考察を行った。



「原田研究室での学びを活かして頑張りたい」と話す下東さん(左)と原田准教授。

2021年度 卒業研究・論文合同発表会 優秀賞

建築学科 江越研究室

住空間の照明デザインについて研究する江越研究室。長吉優香さんの出身地に近く、土地勘のある「豊後大野市三重町」の夜道の安全面や快適性を高めるアイデアをカタチにする研究がスタート。若林幸隆さんとともに、地域住民へのリサーチ、改善案の提案、ワークショップを実施し、地域課題の解決に向けて取り組んだ。



江越助教と長吉さん(右)、若林さん(左)。これからはお客さまの快適な空間の創出を目指す。

地域住民らと協力して 課題解決の 糸口を見つけた

江越 当初、ここまで大きな研究になるとは思っていなかったよ。「地域住民の方たちに育ててもらった研究」と言っても良いかもしれないね。街路灯の改善案を提案するハード面に加えて、ワークショップを開催して、住民の方のマインドを変化させるソフト面も研究に取り入れたからこそ、大きな成果を上げられたと思うよ。実際に地域の方からの声を聞いてどうだった？

長吉 私たちの作品や取り組みに対して、地域で暮らす方からたくさんの方の声を評価をいただきました。初めは「住民の方が本当はどうしたいのか？」という本音が分からず、「私たちの取り組みは正しいのだろうか」と半信半疑で研究を進めていました。しかし、イベント中に地域の方と話していると「実はこういう雰囲気の方がやりたかったんだよ」と言われ、研究とイベントの準備の苦労が達成感へと変わりました。

若林 イベントには、予想をはるかに上回るお客さんが足を運んでくれました。特に、小さなお客さんが喜んでる姿を見ると嬉しかったです。大学キャンパス内での学

びも大切ですが、地域に向向いて、実際にアクションを起こすことで体感できる地域活動の方が、自分自身の達成感や成長度合いが大きいと感じました。

江越 若林くんイベントの実行委員長を依頼したら、迷いながらも快く受けてくれた。もともと皆をまとめるリーダー的な役割は苦手だと言っていたけれど、うまくまとめながらイベントを進行してくれたね。長吉さんは、市場通りの夜の撮影、光度を測るリサーチを1人で行ってた。データ関連はほとんど彼女が集めたものだし、照明器具も自分で制作していた。粘り強く、諦めずに地道に努力するタイプだと思ったよ。

若林 私はリーダーを支えるポジションでコツコツ作業することが好きだったので、正直、実行委員長に就任したときは不安な気持ちばかりでした。しかし自分を変えるチャンスだと前向きに捉えて、チャレンジしようと思った。今となってはこの選択は間違いではなかったと思っています。

長吉 私たちが直前にならないとエンジンがかからないことも多く、江越先生が何度も激励してくれました。いつも気にしていただし、声をかけてくれたおかげで、なんとか無事に卒業研究も終えることができました。

江越 今年初めて4年生を送り出すので、

成し遂げる強い意志で 工学研究の高みへ

原田 発表後、下東くん「正直、今回の入賞は難しいかもしれない」と話していたね。無事に入賞することができて本当に良かった！

下東 しっかりと事前リハーサルをしていたのですが、緊張して本番のプレゼンで失敗してしまっただけで悔しかったです。実験では、翼の角度や数値を少しずつ調節しながら膨大な調査データを収集し、資料にまとめました。実験回数が多く、比較対象も多かった朝から夜まで研究室にこもって研究していました。

原田 回流水槽実験装置を改良し、下東くんが実験に取り組んでくれたので、コルゲート翼に関する重要なデータを集めることができたよ。下東くんはコツコツと研究に取り組める真面目なタイプ。航空宇宙工学科の中でも高い実力を持っているのに、全くひけらかさない。今年は機械電気工学科の学生たちと同じ研究室内で研究していたから、お互い良い刺激になったんじゃないかな。

下東 日頃から「自分はまだまだ勉強不足」と自覚して、何事にも取り組むようにはしています。あらゆるモノやコトから柔軟

に吸収したいと思っていたので、機械電気工学科の学生たちと同じ空間で研究する日々はとても充実していました。機器の使い方を教えてもらったり、研究のアドバイスをもらったのではないかと思います。

原田 春からは長岡技術科学大学大学院の工学専攻に進学するね。きつとNBUとは全く違う世界が広がっている。知識が豊富な人も多いし、パワーのある人も多いだろう。その環境の中で研究に取り組めるのは意味のあること。厳しい環境かもしれないけれど、ときには挫折も味わいながら、研究者として成長してほしいよ。

下東 卒業研究での研究内容はここで一度終わりますが、原田研究室で学んだ流れに関するさまざまな知識を礎にして、進学後は円柱翼型風車の研究の知識を深めていく予定です。これまでに以上に熱心に研究に取り組みます。

原田 工学研究としては大学4年間で目次の部分を学んで、いよいよ大学院で本編が始まる。これからもたくさん深く勉強して自分のやりたい研究を見つけることが大切だよ。これからは下東くんらしく、たくさん悩んで自分なりの答えを見つけてね。

下東 研究に集中するのはもちろん、さま

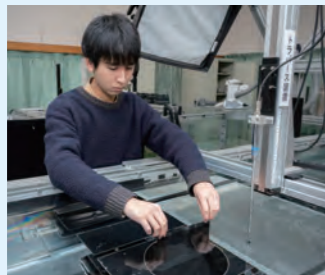
彼らが江越研究室の第1期の卒業生です。先輩がいなくてよく頑張ってくれたと思う。4月からは長吉さんは設計事務所、若林くんは施工会社での仕事が始まるね。君たちなら環境に育ててもらいながら、どんどん成長できるはず。2人の活躍を楽しみにしているよ。

テーマ | 豊後大野市 三重町市場通り活性化のための 光環境改善ワークショップ



かつて宿場町として栄えた豊後大野市三重町市場通りは、街路灯の老朽化が進み、街の夜の安全、安心が脅かされている。街の光環境の創出、誇りを持つ夜の景観づくりを目指し、市場通りを対象にリサーチ、アンケートを行い、街路灯を設置を提案。また、2021年10月に開催されたイベント「かたるみえ」にて、光に関するワークショップを実施し、地域住民とともにまちの課題を考え、住民の意識を向上させることができた。

テーマ | 回流水槽を用いたトンボの翅周りの流れの解明



原田研究室で行っているマイクロ・エコ風車の研究。風車の翼型としている「コルゲート翼」の優位性を証明するため、レイノルズ数をパラメータとして、回流水槽を用いてコルゲート翼、キャンパ翼、平板翼の翼周りの流れを計測し、比較。実験結果からは、コルゲート翼の優位性は立証できなかったが、「強度」に着目したコルゲート翼の研究、キャンパ翼よりも性能が高いオリジナルコルゲート翼の開発など、今後の研究課題となりうるテーマを発見。コルゲート翼に秘めた可能性を見出した。

さまざまなことを経験する充実した大学院生活にしたと思っています。まだ明確な将来のビジョンはありませんが、大学での学びに加え、大学院での学びを糧に本当にやりたい仕事をしたいと思っています。

新型コロナウイルスの影響で海外渡航や留学が制限されている今、学校での英語教育のあり方が変化しています。ニュージーランドから日本への留学経験を持つコリンズ准教授が、英語力を高める方法や、コロナ禍での新しいコミュニケーションについて語ります。



コミュニケーションの極意は 英語を恐れないこと

日本メーカーの自動車整備をしていた父親の影響からか、もともと日本の文化やものづくりの技術に興味がありました。その後、高校の修学旅行で日本を訪れた際に「絶対にまた来よう」と決意。そこから何度かニュージーランドと大分とで生活拠点を移しながら、2019年にNBUに着任しました。NBU生は、グローバルな視点を持って地域に貢献したいと考えるグローバル系が多いと感じます。小学校からの英語教育が必修になり、10年前と比べても県内在住の外国人も増え、英語がますます身近なものになりました。だからこそ、学生たちと一緒に、地域の子どもたちに英語を教える取り組みを積極的に実施していきたいと思っています。子どもたちは英語を楽しく覚え、学生たちは英語教育を実践的に学ぶことができます。学生の皆さんに忘れてほしくないのは、話すことを恐れずに、気軽なマインドで英語に触れるということ。他国の言語を完璧にマスターするよりも、失敗を恐れない姿勢で会話をしてみるこそ、コミュニケーションの極意だと思っています。

コロナ禍によって変化した 英語教育のスタイル

コロナ禍以前は、NBUでも短期海外研修や国際交流も積極的に実施していました。しかし、未だ海外渡航も制限され、大人数での授業やイベントも実施が難しい状況にあります。そこで、現在導入しているのがZoomを活用して交流するオンライン留学です。事前に設定したテーマについて、学生とホストファミリーがオンラインで議論するスタイルです。現地の空気は感じられないものの、海外の方と気軽にコミュニケーションを取ることができるメリットがあります。今の状況が落ち着けば、また留学や国際交流、地域交流が再開されますが、引き続き、オンラインを効果的に活用したコミュニケーションは続くでしょう。社会に出てからも、海外の取引先との打ち合わせや会議などはオンラインが主流になるはず。「学生の内からその環境に慣れることができた」とポジティブに捉えて欲しいですね。

宇宙港準備が進む今こそ 主体的に英語を学んでほしい

アフターコロナでは、海外からの観光客やスポーツ選手、留学生などが増加すると見込まれます。さらに、大分空港がアジア初の水平型宇宙港となり、物流、観光、科学技術や文化の拠点として発展する可能性を秘めています。これから海外の人と接する機会が増えていくことを見据え、海外渡航が難しい今だからこそ、英語をどう学び、どう活かし、どう自分の武器にするのか考えるのに最適なタイミングだと思います。言語を習得するためには、普段から英語に親しむ環境をつくる、積極的なコミュニケーションを心がけるなど、小さな積み重ねも重要です。「感動を伝えたい、分かち合いたい」というマインドさえあれば、自然と言葉は生まれます。学生たちには、この限られた環境の中で、主体的に行動し、チャンスを掴み取ってほしいです。



経営経済学部 経営経済学科 准教授
ジョン・コリンズ
JOHN COLLINS

ニュージーランド出身。ユニテック工科大学語学学部 日本語学科卒業。熊本学園大学外国語学部英米学科で交換留学。立命館アジア太平洋大学(学長室、言語教育センター)を経て、2019年より現職。主な研究分野は英語教育、第二言語習得論など。



OAB大感謝祭 廃材アートプロジェクト

廃材に新たな価値を創造する サステナブルなイベント

2021年10月にOAB大分朝日放送との共同企画として、SDGsをテーマに、海に落ちているペットボトルゴミなどを使った「廃材アートプロジェクト」を実施。その模様が「OAB大感謝祭 もっとJIMOTTO! Let'sスマイル!」で放映され、大きな反響を呼びました。



Chapter 1 学科や部活の枠組みを超えて 1つの目標に取り組む

プロジェクトスタートのきっかけは、OAB大分朝日放送から「SDGsをテーマに学生とプロジェクトに取り組めないか」との相談を受けたことでした。これまでに実施してきた、美術部制作の「廃かまぼこ板アート」や建

築学科が取り組む「ピーチクリーニング活動」から着想を得て、流木やペットボトルなどの廃材を活用したアート作品の制作がスタート。計画を進めていく中で、航空宇宙工学科での「マイクロ・エコ風車」の構造をヒントにして、ペットボトルで作成した風車も作品に取り入れることにしました。風車の土台となる竹の伐採からカット・配置を主に担

当したのは「建築研究会」の有志のメンバーたち。使用済みのペットボトルを使って、風車を作成したのは「航空宇宙工学科」の有志学生たち。完成した風車の着色や作品説明用のパネル制作を担当したのは「美術部」の有志部員たち。それぞれが得意分野を活かし、分担しながら、アート作品を作り上げました。

Chapter 2 “廃材アート”で生まれた、たくさんの笑顔

番組のテーマである「Let'sスマイル!」にちなんで作品のモチーフにしたのは「笑顔の“しわ”」。上から見て絵として成立していること、横から見て空間の奥行きを感じることを重視し、空間デザインを設計し、実際にカタチにしていきました。風車の高さを若干変えて、動きを生み出し、人のスケール感を感じることも意

識しました。会場となる別府ラクテンチの広場では、実際に設置してみると地面の質感や高低差など、想定とは異なることばかり。現地では変更を加えながら、参加メンバー全員で協力し、限られた時間内で風車の設置を進めました。制作スタートからお披露目まで、約1ヶ月。タイトなスケジュールの中、学生たちのアイデ

アや努力がたくさん詰まった作品が完成。アナウンサーやタレントの皆さんと一緒に制作している様子、風車で楽しむ様子が「OAB大感謝祭 もっとJIMOTTO! Let'sスマイル!」にて放映されました。コロナ禍で活動の場が少なくなっていた学生たちにとって、貴重な成果発表の場となりました。

ジブンを磨く、ミライを拓く。

地域の皆さんとともに元気なまちをつくりたい。豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続けたい。そんな想いを胸に、大分県全域を学びのフィールドに、さまざまな活動を展開しています。



今注目のスポーツ選手をご紹介！

i-SPO
Soccer

経営経済学部 経営経済学科4年

清水 羅偉

夢の大舞台で
全カプレーを誓う。

07

今、私たちができる
SDGsを考えよう。

工学部 建築学科 中西研究室

橋口 睦月
岩川 志音
田城 佑衣

Karuta

i-CUL

次世代のクリエイターはキミだ！



2021年の夏に開催された「2021年度第45回総理大臣杯 全日本大学サッカートーナメント」において、念願のベスト8を果たしたNBUサッカー部。キャプテンとして、チームの守護神であるゴールキーパーとして、チームの勝利に貢献した清水羅偉さんは、2022シーズンから宮崎市に拠点を構えるJ3「テゲバジャーロ宮崎」へ加入することが決定した。

もともとフィールドプレイヤーだった清水さんは、小学校6年生のときにゴールキーパーに転身。近年、ゴールキーパーには守備能力に加え、攻撃面の能力を求められることも多く、後方からパスをつなぎゴールに結びつけるビルドアップを得意とし、攻撃の流れをつくるプレースタイルはこの転身で身につけた強みだ。攻守両方でゲームに関わり続けることができるのが何よりの武器になっている。

3歳の頃、兄の影響でサッカーを始め、幼少期からプロの舞台を目標に小学4年生から高校まで大分トリニータのクラブユースでプレーした。高校卒業後はNBUサッカー部に加入。3年生でキャプテンに就任すると、チームスローガンとして「共創進」を掲げた。「街の清掃活動などに積極的に参加し、地域と“共”に歩む。先輩たちが作り上げたサッカー部を受け継ぎ、部員全員で歴史を“創”る。未来に向けて“進”むという想いで、チーム一丸となってここまでやってきた」と語る。また「大学の部活動でプレーしたことが、視野を広げることにつながった。NBUサッカー部は、チーム全員が多種多様

な考えを持っていて刺激的な毎日だった」と振り返る。在学中、熱心に取り組んだのはサッカーだけではない。卒業後もサッカーを続けることを決心していたが、勉強や就職活動も疎かにすることはなかった。

就職活動では、企業の社長からお話をお聞きする貴重な機会をいただき、社会情勢や社会の仕組みなど改めて知ること、社会で生きている一員であることを再認識した。「就職活動を行ったことで、多くの人のおかげでプレーできると改めて実感した。サッカーに向き合う姿勢も新たになった」と話す。

加入する「テゲバジャーロ宮崎」は2021年にJリーグに参入したばかりのチーム。選手をはじめ、サポーターもチームを盛り上げようとチームの理念“真摯”のもと、全てに対して真剣に向き合っている。「試合前、試合後には、深々と一礼する。全員がしっかりと感謝の気持ちを持ってプレーする魅力的なチームだ」と語る。今シーズンは2022年3月13日に開幕。熱い声援を背負って、夢の大舞台でピッチに立つ姿が楽しみだ。



しみずらい(大分県/大分東明高校出身)大分トリニータU-12、U-15、U-18(2017大分トリニータ2種登録)でのプレーを経てNBUサッカー部へ。堅実な守備の先に、攻撃の起点にもなれる“チームの守護神”を目指す。「憧れの舞台上で勝利に貢献できるよう、全力でがんばります！」と意気込む。

「SDGs」とは、2015年9月の国連サミットで採択され、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標のこと。17のゴール・169のターゲットから構成され、世界中のさまざまな団体が解決を目指して積極的に取り組み、今やグローバルスタンダードとなった。

『海からはじまるSDGs』や『SDGsを学ぶビーチフルデイ2021 in 田ノ浦ビーチ』など、大分県下でのさまざまな活動を通して、SDGsについて考える機会が多かった中西研究室。「未来を担う子どもたち」のために自分たちが今できることを考え、生まれたのが『SDGsからた作成プロジェクト』だ。

橋口さん、岩川さん、田城さんの3名を中心としたゼミのメンバーで「子どもたちと一緒に作るたを作ってSDGsについて学ぶ」企画を立案。リサーチ、仕様決定、地域の小学校への協力依頼、印刷所との交渉などの役割をそれぞれが分担して行った。読み札の内容は学生たちが考え、絵札のイラストは地域の小学生たちに描いてもらう。子どもたちに企画を理解してもらうことに加え、まずはプロジェクトメンバー全

員がSDGsへの知識を深めなくてはならない。「これまでなんとなく分かっていたつもりだったが、知らないことばかりだった。世界には、さまざまな人がいて、自分の置かれた状況は世界の当たり前ではない。普段からSDGsについて意識するようになった」と振り返る。このプロジェクトに取り組むことで、日常生活の中に気づきや関心が芽生え、多くの学びが生まれた。始めのうちは何もかも手探りだったが、今秋の商品化を目指して遂行中。サンプル作成やアンケート集計など、まだまだやることは山積みだが、現在は5月に実施予定の小学生たちを対象としたSDGs授業に向けて準備を進めているところだ。

より良い世界のために、自分たちに何ができるのか、今、何をすべきなのかを考えてアクションを起こし、自ら課題を見つけ、解決に導く力を身につけた学生たち。将来は、建築や土木、まちづくりに関わる三者三様の夢がある。今回のプロジェクトを糧に、未来を見据えて考え、行動し、夢を掴むことができるはず。



はしぐち むつき(宮崎県/県立日向高校出身)リーダーとして、全体の進行状況を確認しながら、自身の担当もこなし、プロジェクト成功を目指す。将来は建築・土木分野で地元貢献したいと語る。



いわかわ しおん(大分県/竹田南高校出身)自身と同じ出身地である竹田でのプロジェクトへ協力したいとの想いから、中西准教授の研究室へ。将来は広告やデザイン分野で竹田市のまちづくりに携わりたいと考える。



たしろ ゆい(大分県/県立大分鶴崎高校出身)大分市田ノ浦ビーチで開催された「マリンスクール2021」に参加し、子どもたちへの環境教育の重要性を再確認。将来は、土木・まちづくりに関連の職業に就くことを目指す。

様々なフィールドで活躍する
NBU生の「リアル」に密着。
学生が描き出す、色とりどりの世界を
ご紹介します。

NBU COLORS



25 工学部 情報メディア学科4年
川崎 健太
(大分県/県立大分雄城台高校出身)

大学での学びを就職につなげ 大分で活躍するIT技術者へ

高校時代からIT関連の職業に就きたいと考え、大分県内で情報メディア分野を学べるNBUへの進学を決めた。大学での授業や研究を通して、情報技術への興味がより一層高まり、研究室を決定するタイミングでは、自分の興味のある研究ができる松永研究室を選択。「RGB画像による人間の深部体温計測に関する研究」を行った。さらに研究を重ねることで、目指す分野が明確になった。就職活動をスタートさせた3年生の11月からは積極的に合同説明会へ参加、就職試験に挑戦した。その結果、入社を決めたのは「モバイルクリエイティブ株式会社」。「地元の大分で働きながら、ドローンやロボットなどを活用した先端技術を学べるのでワクワクしている。将来的にはソフトウェア開発にも携わりたい」と目を輝かせる。大学卒業を目前に「基本情報技術者」の資格取得を目指し、勉強中だという川崎さん。また、先輩たちに技術者としての心構えについて相談するなど、社会人として、時代を牽引する技術者として、準備は万端だ。



【自慢の1カット】

熱中症予防の観点から、「深部体温の測定を直腸温度や食道温度で測る方法ではなく、RGB画像で簡単に測定できるようにすれば、医療分野の発展にも寄与するのでは」と研究テーマを設定した。



26 経営経済学部 経営経済学科4年
チェ ジス
(韓国/忠清北道清州市出身)

地域の温かさに触れて 将来の夢を再確認

韓国にいた頃、日本好きの父の影響で小学生から日本語の勉強をスタート。中学生で日常会話レベルの日本語を話せるようになった。友人らと福岡と大分を訪れた際、日本のホテルスタッフのホスピタリティに驚き、ホテリエに憧れるように。NBUへの留学を決めたのは高校2年の頃。母親から勧められたことがきっかけだった。「それまでは韓国で日本語の勉強ができたらいなと思っていました。でも、NBUなら日本語だけでなく、日本の文化や経済のことなど、関心のある分野が深く学べることを知り、自然と留学準備を始めていました」と話す。入学当初は文化の違いに驚く日々が続いたが、地元住民や高校生との韓国料理教室など、地域交流に積極的に参加し、充実した大学生活を過ごした。コロナ禍で人との関わりが減り、改めて人と接することが大好きなのだと感じた。卒業後は福岡市内のホテルに就職予定で憧れのホテリエとしての第1歩を踏み出す。持ち前の明るさを活かし、温かいサービスと優しい笑顔をとくさんの人に届けてほしい。



【自慢の1カット】

「さいき大入島コース」で開催されたシーサイドオルレに韓国入学生12名で参加。なかなか行く機会がなかった「大入島」を知るとともに、地域の方々と一緒にトレッキングにも挑戦し、コミュニケーションを楽しんだ。



27 経営経済学部 経営経済学科4年
藤丸 沙加
(大分県/県立臼杵高等学校出身)

早めのスタートダッシュで 公務員への夢をつかみ取る

もともと人の笑顔を見るのが大好きで「故郷を元気にしたい」との想いから、将来は地域振興に関わりたいたいと考えていた藤丸さん。大学入学後、早い時期から地元大分県内で公務員になることを目指すようになった。将来を見据えて、試験対策も早くからスタートさせた。大学での「公務員講座」に注力し、DVDやオンライン授業の動画を見返し、復習するなど堅実に準備を重ねた。第一志望の臼杵市役所の試験が始まったのは4年生の9月。「友人たちがどんどん内定をもらっていたので、日に日に焦りが募り、落ちたらどうしようという気持ちが大きくなった」という。そんな不安に負けず、コツコツと努力をした結果、無事に第一志望の内定を獲得した。「NBUは学生と先生の距離が近く、悩みや困りごとが相談しやすかった。進路開発センターを中心とした就職面でのサポートも充実していて、心強かった」と振り返る。大好きな故郷で働くために努力を重ね、内定を掴み取った。春からは地域のために、街の人たちのために、笑顔で奔走する姿が目に見えそうだ。



【自慢の1カット】

授業の空き時間に図書館で試験勉強をしたり、自宅でDVDテキストを活用したりと試験対策に向けて努力を重ねた。大学時代に一生懸命取り組んだことは「公務員の勉強です!」と笑顔で話す。



28 工学部 航空宇宙工学科4年
六尾 圭悟
(鹿児島県/県立楠峰高校出身)

宇宙に想いを馳せて 大学院進学への道へ

高校時代から航空宇宙業界に憧れを抱きNBUに進学した六尾さん。工学部の学生有志メンバーで取り組んでいる「NBU CanSat Project」では、超小型人工衛星を模したCanSatの製作などに没頭。2020年12月にNBUで開催したイベント「第1回 CanSat Competition in Oita」では大会の企画・運営にも関わった。また、東京で開催される学会や勉強会にも参加することで同じ道を志す他大学の学生とも交流を深めた。卒業研究では粒子法を用いて流れの解析を行う流体解析を研究。「企業や研究機関と共同で研究をしている先生方や、ハイレベルな研究にチャレンジする友人たちに囲まれ、刺激的な毎日だった」と振り返る。大学生活を通して、壮大な宇宙への想いはますます大きくなり、卒業後は日本大学の大学院に進学し、宇宙開発に関する研究を深める予定だ。「大分空港がアジア初のスペースポートになるという大ニュースなど、宇宙開発事情は世界規模で拡大していく。宇宙開発エンジニアとなり、いずれは仲間たちと起業したい」と語る。夢と可能性に溢れた挑戦はまだ続く。



【自慢の1カット】

大学院進学に向けて、さまざまな論文や資料をもとに学びを深めている六尾さん。夢への第一歩に近づくため、常に志を高く、前向きに臨むように心がけているという。

キラリびと

NBUのキャンパス内で「キラリ」と輝くあなたを発見!



経営経済学部 経営経済学科2年

ゴンザレス グロリア ミッチェル

(アメリカ/日本文理大学 別科日本語課程出身)

「コロナ禍で入学式は中止、しばらくはリモート授業だったので、入学当初は友達づくりが大変だった」と振り返る。故郷の料理を作ったり、大分の名所に出かけたり、ようやく友人と一緒に大学生活を満喫できるようになった。大学で日本のことを学ぶことはもちろん、実際に京都に行き、和服を着て抹茶を味わうなど日本文化を肌で感じたいと話す。「大学で学ぶ経済や経営の分野にも興味があるけれど、英語教師のように人とのコミュニケーションを楽しむ仕事にも惹かれる」と、夢探しの真っ最中だ。